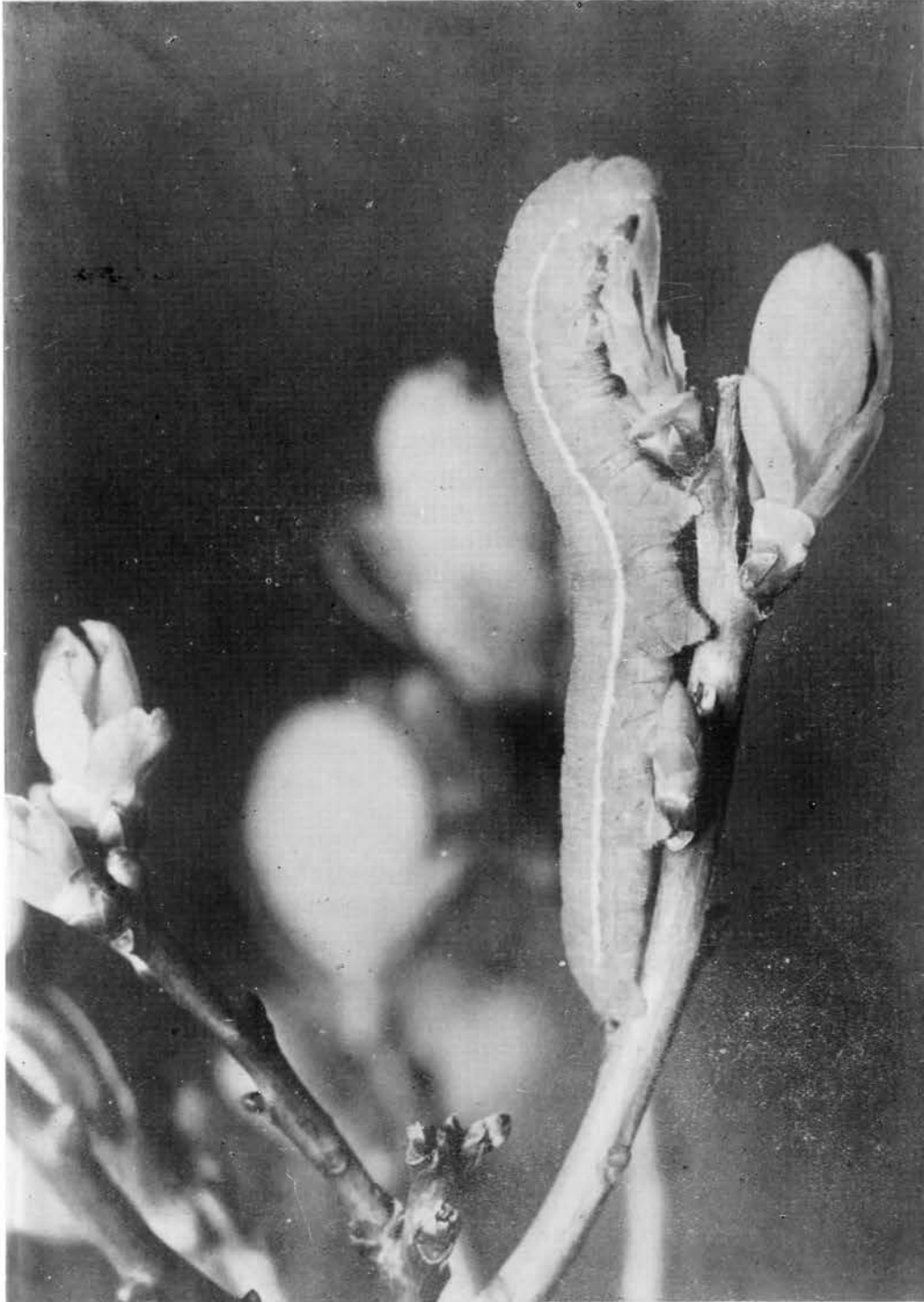


やま博物館

編集責任者 大町山岳博物館



あるぶすもんきちよう

Colias palaeno sugitanii Esaki

本州中部地方の高山に産する高山蝶で現在のところ北海道からは未記録であります。浅間山及びその附近に産するものは翅の黒帯が極めて巾広く、これをアサモンキチョウ (*ais* Frühstorfer) と云い、北アルプス一帯の高山草本帯(1500~2500m)に見られるものは、やや小型で翅の黒帯が狭く、これは独立亜種としてアルプスモンキチョウ (*sugitanii* Esaki) と称ばれています。したがって当地方の山岳地帯には後者が棲息しています。

成虫は体長13mm内外、翅を拡げた時の長さは、45mm内外で雌は雄よりも、やや大型である。雄では翅及び体共に鮮黄色で平地で普通見られるモンキチョウに似ているが前述のごとく前後翅共に外縁に巾広い黒帯が走っている。雌は常に淡黄色を呈していますが、どちらかと云えば白色に近い色でしょう。モンキチョウの様に雄型の雌(鮮黄色翅の雌)は発見されていません。したがって雌雄の鑑別は翅色によって明瞭に区別することが出来ません。発生は年一回の様で7月下旬から9月初旬まで見られ、産卵はシヤクナゲ科のクロマメノキと云う高山灌木の葉裏に一卵宛行なわれます。孵化した幼虫は年内に3令まで達し、そのまま葉や枯葉の下にもぐり込んで越冬し翌年雪融けと共に再び活動し、充分成熟を待って化蝶する。そして7月下旬羽化すると云われています。北安曇地方における本種の棲息状況は余り判然としていないが、今迄の調査によると烏帽子岳、針の木岳、爺岳、冷池、鹿島槍岳、餓鬼岳等に可成り産していると報告されていますが、未だに五龍岳以北の山岳地帯、特にクロマメノキの豊富な白馬岳に発見されていないのは興味深い事実です。

本種名の *Palaeno* と云う意味は、湿地に遊ぶ妖精の名でこの蝶が湿原に多いところから名づけられたものです。

また亜種名 *sugitanii* は蝶類研究者として有名な杉谷岩彦教授にちなんで命名されたものです。



三ツ嶽より立山を望む 右の大きな谷は立山の御山谷、鞍部は一ノ越、その右が大汝山、左が浄土山。御山谷の一つ左の谷が中谷。中谷を登りつめたところがザラ峠。ザラ峠の左に見える白雪の平は五色ヶ原で、五色から下った尾根の中間の鞍部が刈安峠である。一ノ越から室堂までは1.5km程。黒部から御山谷を登って室堂へ下ることができる。針ノ木から立山温泉へ抜ける場合針ノ木谷を下って黒部本流に出て、吊橋を渡って対岸の平ノ小屋に至り、平からスクイ谷の左につけられた道を刈安峠まで登れば道は二つに分れる。右をとれば中谷へ入り、これをつめればザラ峠に至る。左をとって尾根筋を登りつめると広大な五色原へ入る。ザラ峠及び五色からはそれぞれ立山温泉へ下れる。(5月28日撮影)



城村ガイド大谷氏、右は蟹沢氏(五、二八)設置前の一休み…立っている人物は左が北

黒部川上流地域雨量観測

100日巻自記雨量計を設置

その壮大、豪壮、幽深さに於いて他に比類なく、日本に於ける最大にして最高の溪谷とらたわれる黒部、この大溪谷に平ノ小屋を中心とし、上は東沢出合から下は赤沢岳真下に至る間8000mの長大なダムが造られようとしている。関西電力の黒部川上流開発計画がこれである。即ち黒部は通からず大変貌を遂げるであろう。薬師連峰や黒部溪谷上流は日本の幽しい境であり、山なれた人のみが入りうる北アルプスの奥の院でもある。その壮麗な森林や溪谷の景観はもとより、未だ解明されない大自然は幾多の学問的価値を蔵しているものと考えられるから、工事にともなり溪谷変貌以前に於いて、この地の学術調査が本館の手によってなされなければならない。本館は大町市の総合開発に科学的裏付けを行うことを大目標とし、時勢の進運にとらみ合せて本年度から黒部溪谷の予備調査を開始した。

自記雨量計の設置に協力

関電では発電能力の算定その他の必要上、ダム設定地点より上方に20台の長期自記雨量計を設置し、数ヶ年にわたって山岳雨量の観測を行うことになった。今年の設置作業は雨量計を製作した明石製作所が引き受け、大町山岳博物館が観測、設置等の技術面に於いて協力することになった。

山岳気象の本格的な研究へ

日本に於ける山岳気象の観測結果は今まで極めて断片的なもののみであり、北アルプスに関しては殆ど見るべきデータをもたない。特に山岳に於る雨量の分布や雨の強さは平地では予想が困難であり、この継続的な長期観測結果は我が国気象学界はもとより、水害発電

等の対策には益するところが極めて大きい。五ヶ年計画をもって大自然の究明に乗り出し、北アの登山を指導しようという本館にとっては、身をもって山岳気象の研究に当ることが必要であり、今回広大な地域にわたる長期雨量観測が実施できることは意義深いものである。

すでに観測を開始

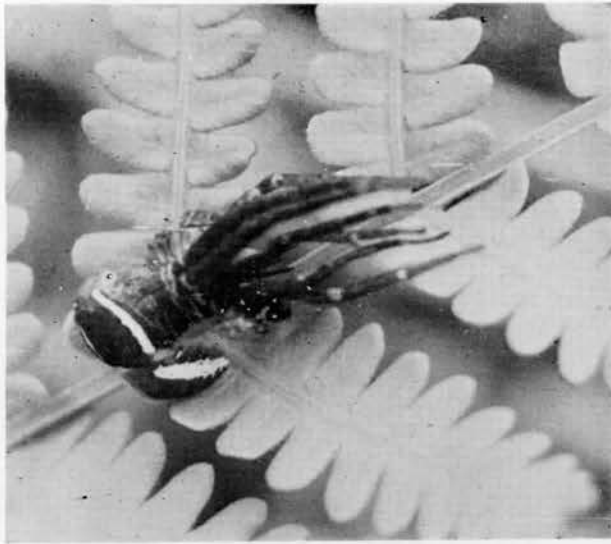
烏帽子嶽方面の第一次雨量計設置作業は、5月26日～29日に行われ、南沢、三ツ嶽、野口五郎、水晶、赤嶽等に6台の設置が完了した。各計器とも5月27日～28日には観測を開始し、梅雨の状況を刻々と記録しているはずである。なお、この設置作業に当っては4日間にわたる山岳、平地気象の比較観測が2時間おきに行われ、初夏の山の最低気温の観測値をはじめ幾つかの気象資料を得ることができた。

10日間の設置作業

第二次設置作業は今年20日から開始された。第一班は針ノ木峠を下り、針ノ木谷(3台)平ノ小屋、関電第四調査所、御山谷、五色ヶ原、刈安峠、スゴの小屋附近等へ計9台を、第二班は三俣蓮華、赤牛嶽、雲ノ平、黒部五郎、北ノ俣、太郎山、薬師嶽等へ計7台をそれぞれ設置又は移転し、富山を廻って帰町する予定である。この作業は順調に進んでも10日間を要するものとみられる。今回は館員海川、千葉の両君及び、調査員柳沢、松沢の両君が設置隊に参加しているが、今後の中間点検には、多くの博物館関係者の出勤が予定されている。



設置を終つて…木台をクイに止め、水平をみてから測器を取付ける。測器の調整をも含め設置には一時間はかかる。(赤嶽にて撮す)



(クモの脱皮) 春日、卵囊内で孵った幼生は細い糸の落下傘で空中旅行して四散し独立生活に入る。その後八回位脱皮して成体となる

カラを破った動物たち

カラのさまざま

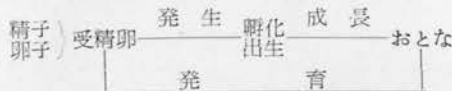
桜花の香が新緑におきかえられる頃、日々の生活の忙しさから忘れ去られた自然の片隅で新しい数々の生命が産声をあげている。

若葉の茂みの蔭にこっそり殻を破った(孵化)のがオオタカの雛それより少し下った茂みの下草では太陽の暑さにたまりかねたように、厚い着物を脱ぎすてた(脱皮)クモ。又、傍の水辺では狭苦しい水中生活に嫌気がさして広い自由な世界を求めて飛びたった(羽化)のがハツチヨウトンボ。

こうして自然の片隅では常に変化に富んだ不思議な生活がくり替げられ、不可思議な力によってカラを破った生命が新しい生活を展開してゆく。

カラを破るといふこと

發育と成長、生命の出発は受精卵から始まる。単細胞の卵子は受精によって細胞の数を増してゆき量の増加と質の分化に伴って一個の生物体の形体形成が進められてゆく(一般にこの全過程を發育と云う)。カラを破ると云うことはこの發育過程のいずれかの段階で



オオタカのヒナ。全身純白色の綿毛をかむる。(六月七日)
地上八米程の赤松の又にかけられた巢の中で孵化した

ある。オオタカは發生から成長の転化期であり、クモの脱皮とトンボの羽化は何れも成長の一時期に含まれる。

形体形成と変態 トンボの羽化は不完全変態する昆虫として、水中生活のヤゴから蛭にならずにそのまま羽化して成体のトンボとなる。彼等は成長の過程において蝶がもっているような蛭期を省略しているわけである。

変態 完全変態(卵期—幼生期—蛭期—成虫期)
不完全変態(卵期—幼生期—成虫期)

量より質への轉化 生物の体は無限に大きくなることは出来ない定った寿命とともに定った大きさがある。しかしその定量までの増加の過程においても単調な増加を続けるのではなく、或量まで増大するとそれ以上の増加は不可能となりカラ破りの質的变化に転化され、再び新しい量的増大が進められて行く。

發育環境の変化 生命の發育は連続的である。受精から始った生物の發育過程はすべて形体形成の過程であり常に前進する変化の過程である。ここで展開されるカラ破りは生物体の發育過程においてなされる發育環境の変化であるにすぎないと云える。

はっちょうとんぼ

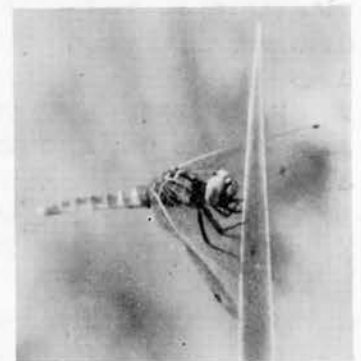
童謡や絵本などでなじみ深い「あかとんぼ」(不均等翅類、とんぼ亜科)の仲間が一番小さい「はっちょうとんぼ」(Nannophya Py gmaca Rambur)は翅の長さ14—15mm、胴の長さ13mm内外と云う超小型種、その珍らしさ、可愛らしさが想像できるでしょう。元来、本種は南方系のもので、愛知県の八丁磯に多産した故、その名前が由来したと云われています。分布地域は極めて広く本州、九州は勿論、台湾、中南華、印度支那、タイ、ビルマ、マレー、スマトラ、ボルネオ、セレベス、モルツカ諸島に産しますが、長野県の如く北方系の強い処には少ない様です。

北安地方における記録は皆無ですが、局地的には一部に知られています。その中多産するのは今度総合調査を行っている居谷里湿原で、出現期間は6月初旬~7月一杯とかなり長期間にわたりますが、最盛期は6月下旬~7月初旬と云う処でしょう。今回の調査の結果、湿原の溝、小川などの中から幼虫(やご)を多数採集し、又幸にも本種の羽化状況(やごからとんぼになる状態)まで十分に観察することが出来ました。(写真参照)



細い草の葉にのぼつて羽化したハツチヨウトンボの雄(6月3日、居谷里)

羽化完了直後、朝の陽光を一杯に受けて翅の伸展を待つ姿は、全く湿原の精の縁でした。本種は雌雄体色を異にし、雌は黒と黄縞模様雄は普通のあかとんぼの様に暗紅色を呈しています。翅は透明で幅広く、雌雄共翅の基部が橙赤色を帯びており、翅脈も同様に彩られています。



ノハナシヨウブの葉の先に止つて休むハツチヨウトンボの雌(6月6日)

【動物園ニュース】 最近動物園の飼育動物が非常に増えて来ています。というのは本年4月より動・植物生態映画「アルプスの鷲」の撮影が開始されているためです。この映画のモデルに使用されるキツネ、イノシシ、コグマ、コザル等がお目見えし、観覧者に盛んに愛嬌を振りまっています。特に仔猿のペロ君、仔熊のチロ、コロ君は大の仲よしで、同じ屋根の下でたわむれ、寝食を共にしています。がさて、6月の梅雨が晴れた一日、チロ、コロの

両君が日光浴に出かけた処、折しも通りかかった館員に、コロがじゃれ木に登る如く体をすると登りはじめた。写真は肩の上までくるとチロ君の耳の毛をなめる如くに髪の毛を物珍らしげにすいた一場面をパチリというところです。



6月の居谷里調査 6月3日を中心月に月例の調査のため動植物、気象、水質、地学の各部門が出動した。写真は永久方形区植物調査。

研究会総会開く

5月27日本年度研究会総会が大町市公民館で開催された。農繁期にもかかわらず出席者は60名をこえ、終始熱心なる討議が行われ、なごやかなうちに閉会した。

午前9時開会、学芸員平林氏の挨拶の後、昭和30年度会計、事業報告を承認する。続いて研究会の組織について説明、討議があって、



各々小、中学生部会、高校生部会に分かれて役員を選出を行った。

総会を終りアトラクションとして映画「アメリカの自然科学博物館クマの丘の上」が上映され、正午記念撮影を行い散会した。

博物館後援会員募集

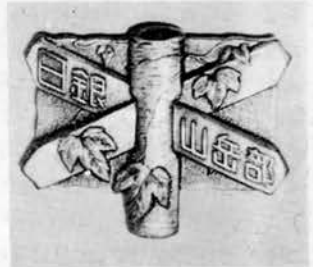
博物館後援会の会員を募集しています。年額千円を納める団体ならびに、年額三百円以上を納める個人を正会員といたします。会員には次のような特典があります。

- 1、博物館の諸指導行事を通知し参加の便をはかる。
- 2、毎月「やま と 博物館」を配布する。
- 3、団体には講師、指導者派遣の求めに応じる。
- 4、博物館に支障のない限り、博物館の資料(標本、図書、写真、図版等)器具の借り出しをあっせんする。
- 5、その他博物館で種名同定、研究指導など諸種の便宜をうけるをあっせんをする。
- 6、いつでも博物館を無料で観覧できる。

おしらせ 本紙の購読を御希望の方には実費 1部10円でおわけします。但し遠方の方は郵送料の実費をいただきます 大町山岳博物館後援会

日本銀行山岳部(東京都中央区日本銀行内)設立は大正11年、バッチは日本銀行員早川義郎氏の作図、東京九段アキバ徽章製作、地金は洋銀、指導標にツタがからんでいるのを図案化したもの、裏面にそれぞれ部員の氏名が記されております

山岳会



日本銀行山岳部

【博物館だより】 5月20日居谷里調査(植物) 21日イマワシ、チョウゲンボウ生態観察(長野市近郊) 22日長期自記雨量計指導講習会(学芸部) 27日研究会総会(事業部) 26日~29日第1次雨量計設置(烏帽子岳~水晶岳方面) 28日居谷里地質調査 29日博物館協議会(公民館) 6月2日~3日居谷里調査(学芸部) 9日第1回同好会「山の歌声」 10日山菜採集会(親ノ原) 13日関西電力雨量調査打合せ、博物館増築推進委員会 16日~17日居谷里調査(学芸部) 18日北アルプス撮影打合せ(会議室)

(今月の寄贈) アオバツク1体 広津村山崎王一氏 ムササビ幼体 南小谷村福本安男氏 仔リス1体 生坂村藤沢健三氏 日本最初のスキー 1冊 昭和電工石原守明氏 マオバツク1体 八坂村塚田勝氏 カルカモ7羽 常盤区牧野馨治氏 ノウサギ幼体 大町市武居氏 キテン1体 北小谷村松沢宏氏。

編集後記 関西電力の黒部川上流地域に対する長期雨量観測は5月下旬から開始されました。本館では引きつづき作業に協力しますが、これを機に北アの山岳気象の解明が注目されます。▲本館の増築は建設推進委員会で着々準備が進められています。後援会でも近く具体的な運動方法が決まります。▲東京支部では今夏「博物館見学とハイキング」を計画し来市する予定ですが、本館ではコースの設定に万全を期しています。

やま と 博 物 館 No.5 1956.6.20発行
 編集 発行人 大町山岳博物館
 発 行 所 大町山岳博物館後援会
 長野県大町市神楽町電話211番
 印 刷 所 信州印刷株式会社